歴史をひもとく

豊中住宅開発物語

武庫川女子大学
生活環境学部 准教授
三宅正弘さん

Profile

24年前の卒論テーマは「箕面有馬電気軌道による郊外住宅地開発に関する研究」。まちづくりや地域デザインの研究素材のひとつとして、食文化からまちを見るというテーマに取り組む。専門は都市計画、美食空間学。

鉄道経営と住宅開発の一体的な展開を日本でいち早く取り入れたのが、阪急電鉄創業者の小林一三であることはよく知られています。その小林一三が手がけた「豊中住宅地」（現・玉井町1・2・4丁目）は、阪急電鉄宝塚線（当時は箕面有馬電気軌道）沿線で3番目の住宅地として売り出され、その後の住宅都市・豊中の発展の礎となりました。これ以降、他の会社も次々と周辺の住宅開発を進めていきました。

都市計画の研究者である三宅正弘さんに、豊中の住宅開発のはじまりをお聞きしました。

手の届く ハイカラ、モダンな郊外生活

池田・室町、箕面・桜井に続いて、大正3年（1914年）から売り出された「豊中住宅地」の特徴は、先行した2か所に比べて、約5万坪と規模が大きく、豊中グラウンドという娯楽施設をセットにした開発手法が、小林一三にとってのひとつの集大成だと三宅さんは語ります。

「豊中停留場（現・豊中駅）を降りて住宅地を通り抜けた先に豊中グラウンドを配置したのは、グラウンドへ行く途中に、分譲中の住宅地を見てもらうことも考えていたと思われます」。

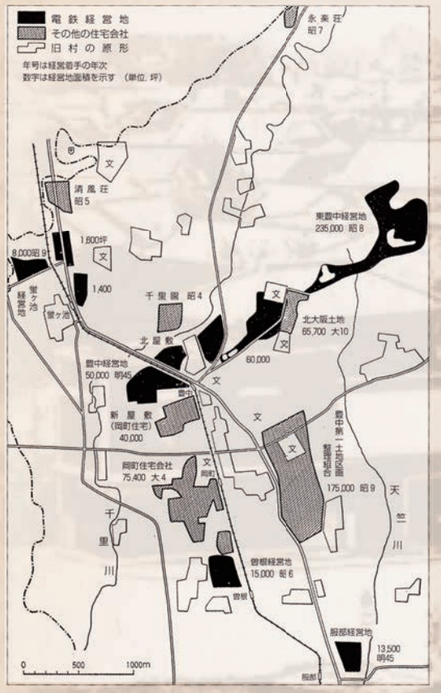
急速に工業化が進んだ大正期は、サラリーマン層という新しい働き方を生み出しました。工業化による大阪市内の環境悪化や住宅不足を背景に、こうしたサラリーマン層に、割賦方式という当時としては画期的な販売方法で住宅地を分譲し、人気を博しました。「豊中住宅地のもうひとつの特徴は、大企業の寮や社宅向けに大きな区画が分譲されたこと。沿線にあった箕面動物園、宝塚温泉などの娯楽施設に加えて、豊中グラウンドがあり身近でスポーツに親しむことのできる豊中は、台頭するサラリーマン層に向けて郊外生活のイメージを伝える一大プロジェクトだったのです」。そして生活関連施設として、住民のための集会所や身の回りの生活用品を扱う購売組合などを居住者とともに育んでいきました。

昭和初期の豊中（新修豊中市史「集落・都市編」）

立花町から末広町にかけて、手入れの行き届いた植栽帯が、ゆとりある景観を生み出しています

他に類を見ない 貴重な新屋敷住宅地

大正9年、豊中住宅地に隣接する地域に、岡町住宅経営株式会社が「新屋敷住宅地」（現・末広町1～3丁目）を開発しました。整然とした街区割り、道幅の広い通りに加えて、車道の両側約2mに整備された植栽帯が、ゆとりある開放的な住宅環境を生み出しました。周辺も含め、今も当時の面影が残る、その優れた景観は他に類を見ない貴重なものだそうです。「住宅地開発としては、当時考えうる最高作品のひとつだと思います。これからも長く残してほしい景観です」と三宅さんは語ります。



明治期末から昭和の初めにかけて次々と住宅地が開発されました（新修豊中市史「集落・都市編」）

和菓子店の多さは 文化のバロメーター

平成22年（2010年）に、「カステラ365日」として1年間毎日違うお店のカステラを求めて全国を食べ歩いた三宅さん。そのとき感じたのは、豊中は手作りカステラが手に入りやすい日本有数のまちだということ。「豊中では阪急沿線各駅に自分の店でカステラを焼いている和菓子店がありました。和菓子店が多いというのは、茶の湯の文化が浸透していることを表していると思います。小林一三が、文化的な郊外生活をイメージした沿線開発と無関係ではないでしょう」。

北大路魯山人ゆかりの料亭・星岡茶寮が、かつて曽根に存在したのも、豊中の文化の成熟度を示す事柄と言えそうです。大阪市内の実業家が贅を尽くして建てた数寄屋造りの別荘が、のちに大阪星岡茶寮として風雅を愛する人々に親しまれました。「堺で始まった茶の湯文化が、大阪・船場を経て郊外の豊中で浸透し、周辺へ広まっていくとともに、大阪の美食文化もまた豊中で成熟していったのだと思います」。

大阪星岡茶寮（昭和10年（1935年）開設）。北大路魯山人らが主宰する美食倶楽部の会員制料亭として東京の星岡茶寮とともに人気を集めました

ちょうど良い頃合の 暮らしやすいまち

豊中は、能勢街道に沿う形で鉄道が敷かれて、その沿線に住宅開発が進みました。「鎮守の杜に加えて古い街道沿いの街並みと、新しい住宅街とが共存する形でまちが形成された」と三宅さんは話します。そのことで、まちの建物や空間、人々との関係が、多様な暮らしのスタイルを許容する、懐の深い、ちょうど良い頃合のまちになったと言えるそうです。気さくで親しみやすい下町文化と、新しいライフスタイルを志向する山の手の両方の魅力を兼ね備えたまちだから、今も多くの人が暮らしやすいと感じるのではないでしょうか。